

バーベキューの輪にとけこむと、  
何者問題が気にならなくなる？

新型コロナウイルスが流行したことで、たくさんの方が集まり、大声でしゃべりながら飲食する機会は激減してしまいました。もしあなたがインドア派で飲み会や同窓会を嫌うタイプだったら、こうした状況は望むところだったでしょう。しかし、生物としての人間は、一般的には寄り集まって語りたがり、一緒に飲み食いしたがりが、楽しみを共有したがる生き物だったはずですよ。

よく晴れた週末の河川敷やキャンプ場では、大勢が集まってバーベキューなどをしてるのが日常の風景でした。みんなで飲み食いして、みんなで語る。打ち解けたバーベキューに参加したところのある人ならわかると思うのですが、バーベキューの輪に打ち解けているときには「自分が何者か」なんて考える必要がありません。そういうことを考えてしまうのは、うまくバーベキューの輪のなかに入れずに隔っことで肉をついついてるときか、独りぼっちのときでしょう。

だから、「自分が何者かわからない」「何者かになりたい」と考える人は、新型コロナウイルスの流行が収まったら、河川敷で打ち解けたバーベキューをしてみたいかがでしようか。……いや、すいません、これは半分冗談です。ですが、打ち解けた輪のなかに入っている人々がどういふ心理状態なのかについて、真面目に考えていただく価値はあると思うのです。輪のなかには、いったいなにが起こっているのでしょうか。

「バーベキューは社交性のある人がやるものだ、社交性のない自分には関係ない」とおっしゃる人もいるかもしれませんが。しかしインターネットがもつと陰気で、社交性の乏しい人々が目立っていた頃を思い出す限り、社交性の高低はあまり関係ないように思えます。というのも、インターネットのオフ会、それこそ「モテない男性が集まってモテない談義をする会」のような場所ですら、集まりに打ち解けていたメンバーは、バーベキューに集う人々と同じように楽しんでいたからです。

バーベキューにしろ、オフ会にしろ、集まりに打ち解けているとき、私たちは自分が何者かなんて悩みません。そういった集まりが盛り上がっているときには「自分」という意識が薄まり、「集まっている自分たち」「おれら・わたしら」といった意識が強くな

ります。

もちろん、たとえば一期一会なオフ会が盛り上がったあとの帰り道に自分という意識がよみがえり、「さっきまで盛り上がっていた自分はいったい何だったのか」「やっぱり自分が何者かわからないじゃないか」とがっかりすることはあるでしょう。ですが、お互いをよく知っている者同士の集まりが定期的に行われ、間柄が安定している場合には、自宅に帰ってもなお「集まっていた自分たち」「おれら・わたしら」といった意識は残ります。

こうした、自分という意識が薄まって「自分が何者か」をあまり考えなくなる現象を意識しながら、第2章に入っていきたいと思います。

## SNS時代は、いつでもどこでも

### 「おれら・わたしら」でいられる

盛り上がったバーベキューのような集まりにとげこんでいるとき、私たちは「何者か

になりたい」という願いからも「自分は何者でもない」という悩みからも遠ざかります。少なくとも、一人で考え事をしてるときに比べれば遠ざかると言えるでしょう。

このことから「何者かになりたい人は永遠に河川敷でバーベキューしていればいい」と主張したいわけではありません。それでも、何人かで集まって話題や飲食を共有している瞬間や、自分よりも「集まっている自分たち」や「おれら・わたしら」が意識として強まる、あの瞬間の効き目を意識しないわけにいきません。

SNSのようなオンライン空間でも、バーベキューに近い状況は起こり得ます。たとえばお気に入りのインフルエンサーがなにかを言っていて、自分がそれに「いいね」をつけて「シェア」をして、自分に近い考え方の他の人々もほとんど「いいね」や「シェア」をしている瞬間、「自分が何者か」を考える意識よりも、インフルエンサーやそれに続く人々と自分がつながっている意識のほうが強まりませんか？

現在のSNSでは、本当は独りぼっちだったとしても、インフルエンサーを一方的にフォローしているだけで「集まっている自分たち」や「おれら・わたしら」を実感することが出来ます。たとえインフルエンサーから何の返答もなかったとしても、みんなと一緒に「いいね」や「シェア」をしていれば、みんなと近しい間柄のような意識になれ

るのです。

これって、考えてみれば凄く発明ですよ。クソリプをまき散らしてみんなにプロックされるような人でない限り、誰でも誰かと一緒にいられる、少なくともその意識とどうか、錯覚のようなものを得られるのですから。そういう意味では、「いいね」や「シェア」を通じてつながっている人々には、孤独という状態が原則あり得ないとも言えるでしょう。

とはいえ、SNSにも限界はあります。さきほど「近しい間柄のよ、な意識」と書いたように、いくら「いいね」や「シェア」で近しい間柄を錯覚できたとしても、それは意識のうえでのことで、現実にインフルエンサーや他のフォロワーたちと親しい間柄になるわけではありません。

また、顔も合わせないSNS上だけのつながりはつながりやすく切れやすいところもあり、数分も経てば「集まっている自分たち」や「おれら・わたしら」の意識が消えてしまいます。もし、SNSをとおして「集まっている自分たち」や「おれら・わたしら」を意識し続けたければ、頻繁にSNSを覗いて、頻繁に「いいね」や「シェア」をしな

ければならないでしょう。

あなたが勤勉で、時間の効率を大切にしたい人だったら、「そんなことはしていられない、もっと有意義に時間を使うべきだ」と考えることでしょう。ところがSNSを眺めていると、びっくりするほど頻繁に「いいね」や「シェア」をつけている人がいます。最近では、不良や暴走族が街でたむろしている姿などはなかなか見かけなくなり、新型コロナウイルスが広まってからはますます人の集まりを見かけにくくなりました。その一方でSNSに目を向ければ、同じ趣味、同じ党派性、同じ境遇でさまざまな人が集まりをつくり、頻繁に「いいね」や「シェア」を取り交わしているのが見てとれます。

インターネットが普及する前、こうした「集まっている自分たち」や「おれら・わたしら」を実感するためには仲間が集まっている場所に実際に脚を運ばなければなりません。たとえばライブハウス、居酒屋、ゲームセンター、バーベキューといった具合に。また不良や暴走族といった集団が今よりずっとたくさんあり、彼らは「集まっている自分たち」や「おれら・わたしら」を非常に大切にしています。とはいえ当時はSNSがなかったため、一人ひとりが孤独に過ごす時間も案外長かったです。

その頃に比べると、私たちはいつでもどこでも簡単につながりやすく、「集まってい

なにもの  
何者かに  
なりたい



2021年6月16日 第1刷発行

著者 くましろう とくしろ  
熊代 亨

イラストレーション 小林ラン

ブックデザイン albireo

校正校閲 konoha

本文DTP 白田彩穂

編集 矢作壺太

発行人 北島夏影

発行所 株式会社イースト・プレス

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-4-7 久月神田ビル

Tel.03-5213-4700 Fax.03-5213-4701

<https://www.eastpress.co.jp>

印刷所 中央精版印刷株式会社

©Toru Kumashiro 2021, Printed in Japan

ISBN 978-4-7816-1983-5

本書の内容の全部または一部を無断で複製・複製・転載することを禁じます。

落丁・乱丁本は小社あてにお送りください。

送料小社負担にてお取り替えいたします。

定価はカバーに表示しています。

る自分たち」や「おれら・わたしら」がインスタントになった世の中を生きていると言えます。これほどつながりやすい時代になったからこそ、SNSの口コミで映画が国民的ヒットとなったり、インフルエンサーが影響力を誇示したりするようになったのでしょうか。

表向き、令和時代は昭和時代よりも個人が重視され、個人主義的であることが望ましいといわれています。しかし、その一方でSNSなどをとおして「集まっている自分たち」や「おれら・わたしら」をインスタントに実現できてしまうこの時代は、「自分」という意識や「自分は何者か」という意識から気が逸れやすい時代でもあると、私は考えています。自室でPCと向き合っているときや電車でスマホをいじっているときの私たちは、見た目のうえではスタンドアロンな個人らしく見えますが、それは見かけ上のことで、打ち解けたバーベキューのときに近い心持ちではないのでしょうか。